

東北大学史料館 新公開資料速報展 (第8回)

2009.12 東北大学史料館

100年前の留学生活と 科学者たちの交流



真島利行文書の絵はがきコレクションから

今回紹介する資料は、東北大学の初代教授の一人で、日本の有機化学研究の育ての親とも言うべき化学者、**真島利行**（まじまりこう：1874-1962）の所蔵していた、知人・友人からの「絵はがき」コレクションです。

真島は、東京帝国大学の助教授であった1907年1月、東大無機化学講座の教授に昇任するため文部省留学生となり、スイスに向かいました。しかし現地到着直後に東北帝国大学の有機化学講座の教授となることを打診され快諾。その後キール大学（ドイツ）、チューリッヒ工科大学（スイス）およびロンドンで研究生活を送り、1911年帰国後すぐ仙台へと赴任しました。その後1933年まで東北帝大理学部で教育と研究にあたり、漆の成分研究や『日本化学総覧』の編集など後世に残る業績をあげています。1933年大阪帝国大学の創立に伴いその理学部長として招かれ、1943年からは大阪帝大総長をつとめています。

展示資料はヨーロッパ留学中のものを主にしており、本多光太郎・石原純といった東北大学の教授たちの名前も見えます。20世紀初頭の日本人科学者たちの留学生活や人間関係を映し出す資料としても、また当時のヨーロッパの風景や市民文化を映し出す資料としても興味深いものです。



(左) ゲッチンゲンの本多光太郎・日下部四郎太からキールの真島にあてた年賀状

(右) プレスラウ大学留学中の楠本長三郎（医学者）から真島にあてた絵八ガキ

(これからの女性たち - 家事は男に任せて...)